

かいのしょうただおと
甲斐 莊 楠音 の全貌 — 絵画、演劇、映画を越境する個性

東京ステーションギャラリー 23.07.01~08.27



「甲斐莊楠音」(1894~1978)は、少年時代から「レオナルド・ダ・ヴィンチ」や「ミケランジェロ」など西洋の美術に心惹かれ、その美を日本画に取り組んで妖艶な人物表現を生み出して、絵画、演劇、映画を越境する個性を有し、大正から昭和にかけて生々しい人間の姿を描いた異色の日本画家である。

本展は画伯の知られざる顔に迫り全貌を回顧する企画であり、構成は、序章：描く人 第1章：こだわる人 第2章：演じる人 第3章：越境する人 終章：数奇な人からなる。展示品は、画伯の絵画だけではなく、沢山のスケッチや彼の女装写真などとともに、東映京都撮影所に保管されていた時代衣装など映画関連資料も取り上げて、絵画から映画へ自由に越境したサービス精神旺盛な彼の芸術の全貌を觀賞することができる。



甲斐莊楠音 《島原の女(京の女)》1920年

左

島原とは、かつて京都に栄えた花街(遊郭)で、描かれている女性は遊郭の最高位の女性「島原の太夫(たゆう)」であると考えられ、黒地の桜の模様を配した豪華な着物に身を包み、何か物思いに沈んでいるような静けさに満ちた顔は「ダヴィンチ」の《モナ・リザ》のように陰影に富んでいる。

甲斐莊楠音 《春》1929年 初公開作品

右

床には植物模様の絨毯が敷かれ屏風が立てられていて、華やかな着物を身にまとい床に横たわっている女性は、袖の上にコップをのせ右手にはストローを持っている姿は、裕福な家庭のモダンな生活を感じられる。

